

令和6年度 第23回公開教育研究大会

生徒エージェンシーを育む  
カリキュラム・マネジメント(2)

～カリキュラムづくりを見据えた教科融合・連携の試み～



東京学芸大学附属高等学校  
Tokyo Gakugei University Senior High School

# 教科融合・教科連携とは？

- ◆ 教科融合：現状の学習指導要領の枠組みを越えて、  
新たな教科や科目をつくること  
(SSH事業などの特例が必要)
- ◆ 教科連携：現状の学習指導要領の枠組みの範囲の中で、  
教科間や科目間で協力すること  
(カリキュラム・マネジメントなども含)

# そもそも … 教科融合や教科連携は必要？

- ◆ SSH申請「期待される研究開発テーマの例」では…  
「理科と数学等の他の教科との**融合教科・科目**とその教育課程の開発」と明示
- ◆ 学習指導要領解説では…  
「**カリキュラム・マネジメント**」は頻出（教科連携）
- ◆ 大学・大学院の改組では…  
**旧来の学問体系を超えた**学科・研究科も少なくない

1.

# 「生徒エージェンシー」

～ OECD Education 2030 におけるエージェンシー ～

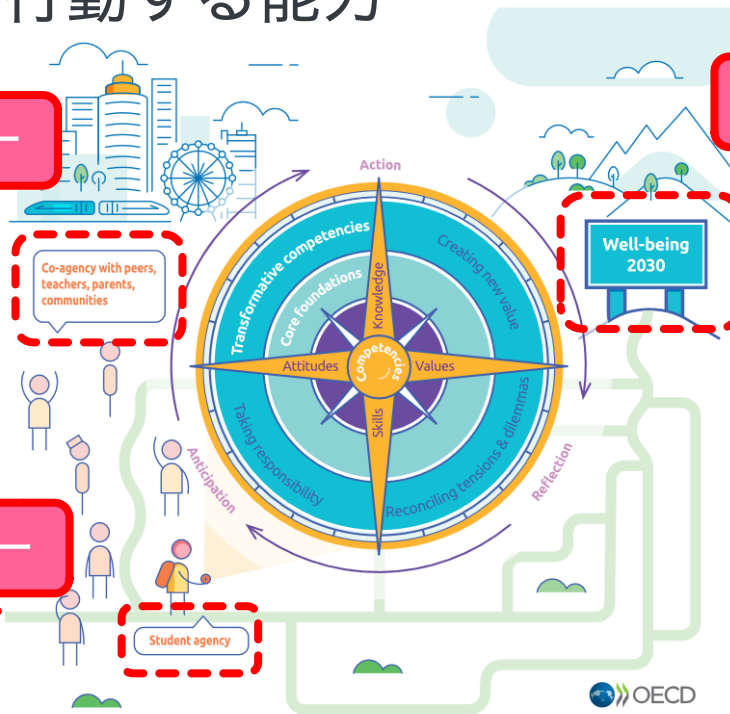
# 生徒エージェンシーとは

変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力

共同エージェンシー

保護者、教師、コミュニティ、そして生徒同士との双方向的な互いに支え合う関係

生徒エージェンシー



Well-being

生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力である

- よりVUCAとなる未来において、「私たちが実現したい未来（The Future We Want）」を実際に実現していくために、エージェンシーが必要になるからである。… エージェンシーとは、「誰かの行動の結果を受け止めることよりも、自分で行動することである。形作られるのを待つよりも、自分で形作ることである。誰かが決めたり選んだことを受け入れることよりも、自分で決定したり、選択することである」と説明されている。
- 文化的・社会的なコンテクストの違いを認め、「統一的に適応可能な『エージェンシー』の定義を作ることとは不可能だとしても、その概念自体はどのような文脈でも関連性がある」としている。
- エージェンシーが、一人一人が成長する社会的・文化的な文脈において、親や仲間、地域の人々などとの関係性を通して育まれるものであるということは、エージェンシーが、生まれながらにして変えられない性格や性質といったものではなく、学習することができるもの(learnable)であるし、変えることができるもの(malleable)であることにも留意したい。

# 2.

## 教科融合・連携への問題意識

～ 国立附属高等学校を対象としたアンケート結果より ～

# 教科融合・教科連携に関するアンケート

- ◆ 対象：  
国立大学附属高等学校・中等教育学校
- ◆ 期間：令和6年8月下旬～9月中旬
- ◆ 回答数：15校
- ◆ 内容：
  - (1) 総合的な探究の時間とカリキュラムの関係性について
  - (2) 総探以外の授業での教科融合・連携について



## 教科融合・教科連携に関するアンケート

【東京学芸大学附属高等学校 教科融合・教科連携に関するアンケート】

アンケートへのご協力ありがとうございます。

このアンケート結果は全附連での発表に活用させていただきます。

また、アンケート結果は、本校公開研、本校SSH関連事業、本校からの報告書などに使用させていただきますので、予めご了解下さい。

ただし、上記全ての発表においては、学校名などがわからない状態で使用させていただきます。

また、アンケートにご回答頂いた学校様にはデータを共有させていただきます。

国立大学附属学校同士の情報共有の手段となれば幸いです。

ただし、データの二次利用は避け、各校内での情報の共有に留めてください。

なお、このアンケート内では「教科融合」・「教科連携」は以下のように使い分けております。

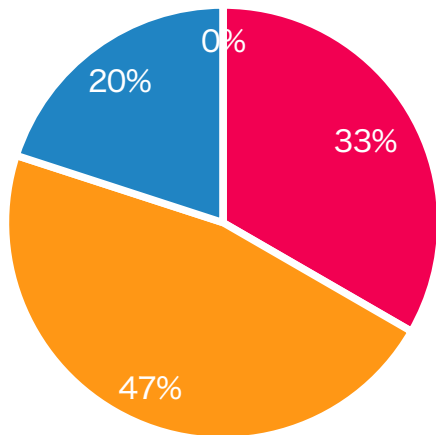
教科融合：学習指導要領の範囲を越えて、特例などによりひとつの教科・科目をつくること。

教科連携：学習指導要領の枠組みの中で、教科・科目間で協力すること。カリキュラム・マネジメントなどを通して連携し合う事例も含む。

ご協力お願い致します。

# アンケート結果 ～ 教科融合について ～

Q) 教科融合は重要？



- 大變重要 (必要) なことである
- やや重要 (必要) なことである
- あまり重要 (必要) なことではない
- 全く重要 (必要) なことではない

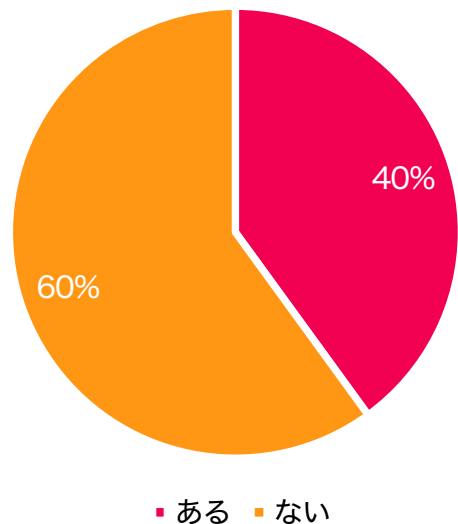
【共通認識】 生徒の中で有機的に知識は繋がっていったり、汎用的なコンピテンシーが育成されたりすることが重要

- ◆ ものの見方・考え方が新しく生まれる可能性がある
- ◆ 教員間がお互いに指導する内容を知る，生徒のシームレスな学びにつながる
- ◆ 各教科科目の理解の上でヒドゥン・カリキュラム※として自然になされるものである

※ 教育する側が意図する・しないに関わらず、学校生活を営む中で、児童・生徒自らが学び取っていく全ての事柄

# アンケート結果 ～ 教科融合について ～

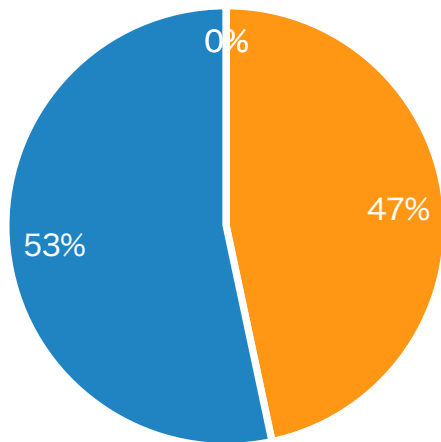
Q) 教科融合科目はある？



- ◆ データサイエンス (2校)
- ◆ 工業情報数理 (工業と数学)
- ◆ 地球市民性を育成するための学校設定科目  
「グローバルライフ」 (家庭科・農業科など)
- ◆ 文系探究「ドキュメンタリー作成」  
(課題研究に関する学校設定科目)

# アンケート結果 ～ 教科融合・連携について ～

Q) 教科融合・連携は進んでいる？



- 十分に進んでいる
- 概ね十分に進んでいる
- あまり進んでいない
- 全く進んでいない

## 【教科融合・連携が進まない理由】

- ◆ 教科によって進度が違うこと
- ◆ 特定の教員への負担の集中すること
- ◆ 教員間の意識の差, 認識ベースのギャップ, 学校全体の合意形成がとれないこと
- ◆ 授業開発の時間の確保が難しいこと
- ◆ 現行の学習指導要領で教えるべき内容が増えたこと

# 3.

## 教科融合・連携の試み

～ 東京学芸大学附属高等学校における令和6年度の取り組み ～

# 過去の実践：SSH事業「特講 科学の方法」

- ◆ 本校SSH事業の「期目」にて取り組んだ授業開発
- ◆ 「科学の方法」を獲得させる教科融合型の授業開発
  - 「科学的手法に基づく授業」「科学的な考え方を育てる授業」
  - 「科学を活用した授業」「科学と連携した授業」「科学について考える授業」
- ◆ 大変意欲的な授業提案も、現在までは根付かず
- ◆ Why ◆ 連携のための連携になってしまったこと
- ◆ 教科融合・連携のため方法論を持ち合わせていなかったこと ex. 強烈なゴールイメージ、特例などの枠組み

# 今年度の本校の取り組み

## ◆ 公開教育研究大会 研究主題

「生徒エージェンシーを育むカリキュラム・マネジメント(2)  
～カリキュラムづくりを見据えた教科融合・連携の試み～」

## ◆ SSH事業（Ⅲ期目1年次）

「生徒エージェンシーを育む次世代理数カリキュラムの開発と普及」

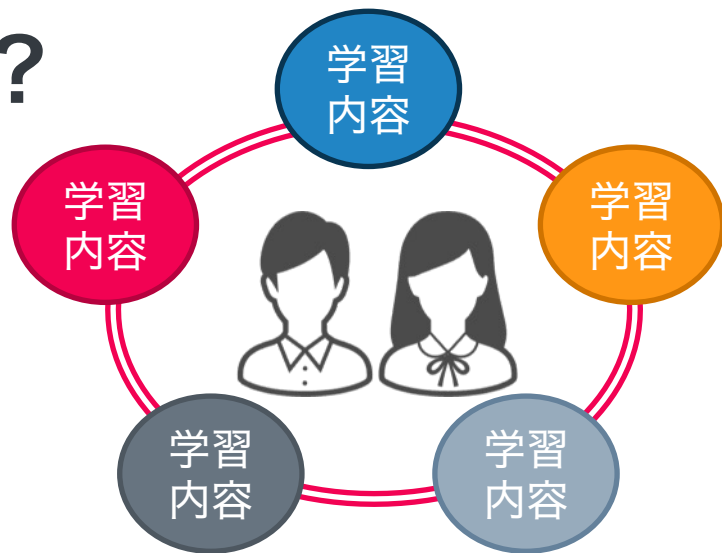
※ 4つの事業のうちの1つ「教科融合・教科連携での授業開発」

## ◆ 学校全体の取り組みとSSH事業の取り組みの方向性を協調



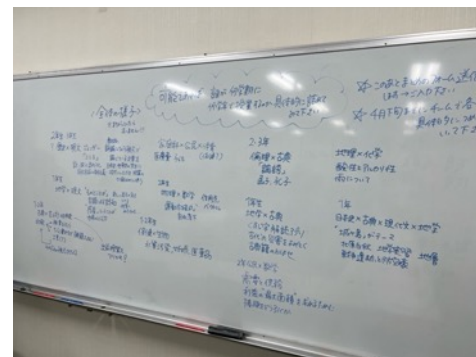
# 何のための教科融合・連携？

- ◆ 学習における**転移**を促すための教科融合・連携
- ◆ より**深い学び**を促すための教科融合・連携
- ◆ カリキュラムを**整理**するための教科融合・連携  
(カリキュラム・オーバーロードの軽減)
- ◆ 教科融合・連携を形にすることの社会的な意義

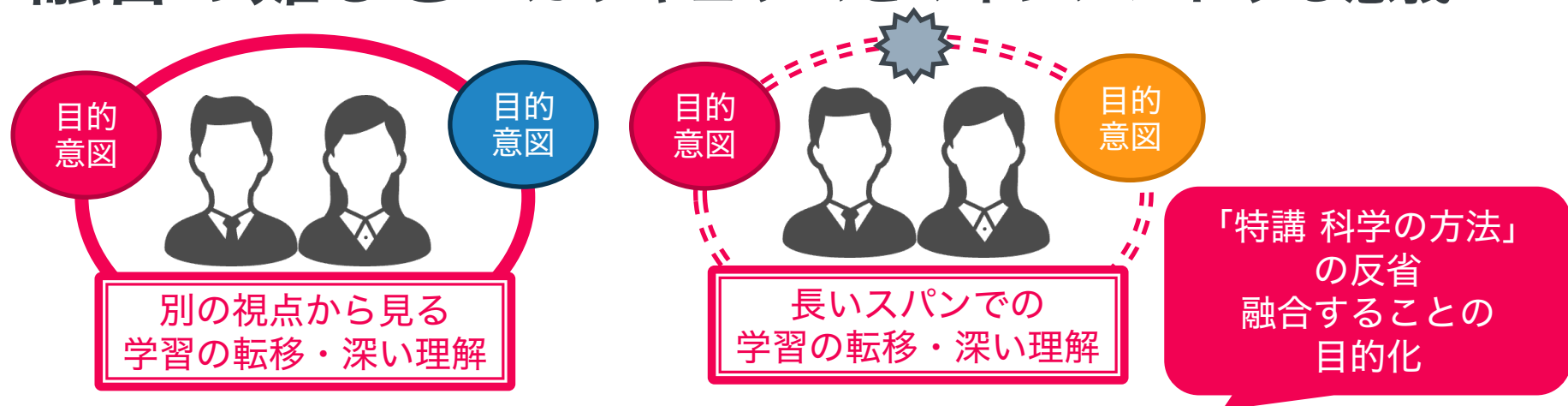


# 定期的な教員研修

回	日時	研修テーマ
第5回	令和6年1月25日(木) 16:00-17:00	「生成AI活用事例の紹介」「教科・科目の連携のアイデアを出そう」
第6回	令和6年2月26日(月) 16:00-17:00	「教科融合・連携に向けての教科・科目での相談」
第7回	令和6年3月27日(水) 13:00-15:00	「教科融合・連携のマッチング (1)」
第1回	令和6年5月23日(木) 16:00-17:00	「教科融合・連携のマッチング (2)」
第2回	令和6年6月12日(水) 16:00-17:00	「教科融合・連携のマッチング (3)」
第3回	令和6年8月27日(火) 13:30-15:30	「公開研に向けて教科・科目の提案を共有する」



# 融合の難しさ～カリキュラムをマネジメントする意義～



- ◆ 教科の組合せによっては「融合」型の授業では各教科のねらい（授業の目的や意図）を満足させることは難しいかもしれない
- ◆ 3年間のカリキュラムの中で「融合」・「連携」をする意義を見出す必要性がある（カリマネの必要性）



まとめ

## 教科融合・連携について取り組みを通して

- ◆ 崇高な理念を語るだけでは教科融合・連携は進まない。SSHにおける特例などのような仕組み，教科融合・連携を進めるための具体的な方法論がなければならない。何かしらの具体例があると良い。
- ◆ 互いが調整し合うような作業はストレスフルである。むしろ新しくモノを創った方が早いし，建設的である。
- ◆ 教科融合・連携について興味のある大人は意外と多い。しかしなかなか実践に移るまでには時間がかかる。
- ◆ 教科融合・連携について受け入れてくれる生徒は多い。

# 参考資料

- OECD (2019) OECD Learning Compass Concept Notes  
(<https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/>)
- 国立教育政策研究所 (2019) 学習評価の在り方ハンドブック (高等学校編)
- 国立教育政策研究所 (2017) PISA2015 年調査国際結果報告書 生徒のwell-being  
([https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2015\\_20170419\\_report.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2015_20170419_report.pdf))
- 白井俊 (2020) OECD Education 2030プロジェクトが描く教育の未来 ～エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム～, ミネルヴァ書房
- 鈴木文孝 (2021) OECD 学びの羅針盤 (Learning Compass) 2030とEducation2030 Phase 2 に向けて  
(<https://www2.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/contents/2.1.1%E3%80%80%E9%88%B4%E6%9C%A8.pdf>)
- 東京学芸大学附属高等学校 研究部 (2023) 「生徒Agencyを育むカリキュラム・マネジメント(1): 探究活動を軸としたカリキュラムづくり 第22回公開教育研究大会を受けて」, 東京学芸大学附属高等学校紀要, 61, pp.117-158
- 文部科学省 (2016) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申), 中央教育審議会答申

## 令和6年度 第23回公開教育研究大会 趣旨説明

ご静聴ありがとうございました。  
本日はどうぞよろしくお願い致します。



東京学芸大学附属高等学校  
Tokyo Gakugei University Senior High School